千葉大学法政経学部

同窓会報

第26号
2016年12月23日発行

故 澁谷敏夫氏　撮影

目次

クローズアップキャリア「銀行について」 …… 1・2
サークル紹介 …… 2
夢を追って ～OB仕事物語り～ …… 3・4
「非行少年との対話～NPO法人『対話の会』が行う少年院における被害者視点教育～」
多方面で活躍される卒業生 …… 5・6
卒業生エッセイ「大学とカフェ」 …… 7・8
大学トピックス …… 8
コラム「苦難の先の光を目指して」 …… 9・10
Information ～同窓会だより～ …… 10
編集後記 …… 11

発行

千葉大学法政経学部同窓会

〒263-8522
千葉市稲毛区弥生町1-33
FAX 043-290-3655

ホームページアドレス
http://culpe-ob.com/

クローズアップキャリア　銀行について

千葉銀行
大久保　壽一
（昭和54年卒）

千葉銀行の大久保と申します。昭和54年卒業と同時に千葉銀行に入行しました。キャリアは本部、特に経営企画部門が20年と長く、本年6月取締役専務執行役員を退任して現在は常勤監査役の任にあります。

さて、銀行とつきあいのない方はいないと思いますが、その役割等を詳しく理解している方は少ないのではないでしょうか。今回は、折角の機会ですから、銀行について少々専門的なお話しをさせて頂きたいと思います。

○銀行について

わが国に初めて銀行ができたのは明治5年、明治維新後の殖産興業を金融面から支えることを目的に設立され、戦後の再編・整備という大きな変革を経て現在に至っています。戦後金融制度は、経済の早期復興・発展、雇用機会の創出及び金融秩序の回復を目的に確立され、政府主導型の規制強化と保護行政をつうじた金融機関の安定性確保による資金の安定供給が特色で、戦後の高度経済成長に大きく貢献しましたが、金融機関には、競争原理に基づく効率的経営への転換の遅れと、自己責任の希薄化による健全性の低下を招きました。

一方日本経済は高度成長の後、オイルショックや円高ショック等を経て「低成長」、「グローバル化」及び「金融自由化」が進み、企業の資金調達の態様が銀行貸出等の間接金融から債券・株式等の直接金融へシフトしました。

その結果、資金余剰となった銀行融資が不動産・株式取得等の投機資金に向かいましたが、バブル崩壊により不良債権化、その後の不良債権処理のなかで金融機関が破綻するなど、金融危機と言われる事態を迎えました。金融機関に対しては『預金者保護のための資産の健全性維持』が強く求められるところとなり、その反動として「貸し渋り」が社会問題化しました。数々の経済対策も決め手とならず、日本経済は、長期に亘る景気低迷とデフレという失われた20年を過ごすことになりました。その間も、米国サブ・プライム・モーゲージ問題を背景に世界金融危機が発生し、日本の金融機関への直接的な影響は限定的でしたが、株式市場や実体経済に悪影響を及ぼし、間接的には相応の影響を受けることになりました。

こうしたマクロ経済の悪化がミクロ面にも影響し、少子・高齢化、新興国台頭とそれに伴う比較優位構造の変化及びＩＴの飛躍的進歩等の構造変化への対応が、経済再生の課題となっています。そして、金融機関に対しても、先ほど申し上げた金融危機時の『資産の健全性維持』から『円滑化（経済の持続的成長と地方創生への貢献）』へ、求められるものが変わってきています。

○千葉銀行について

千葉銀行は戦前の「一県一行主義」の中で、県内の銀行が合併して昭和18年に設立しました。地域の皆様に支えられ、一貫して地域金融機関として金融サービスの提供をつうじて、地域のお客さまのニーズにお応えし、地域の発展に貢献するという「地域密着型金融」を実践してきました。金融危機時も公的資金の注入を受けることなく、健全経営を維持してきました。

業務面では、銀行の3大業務の預金・貸出・為替に加え、規制緩和の進展とともに証券・保険・コンサルティング等業務の幅を広げ、ビジネスマッチング、企業立地・海外展開支援、産学連携、動産担保融資、ＷＥＢＥＢ、でんさい、ＣＭＳ、確定拠出年金、事業承継・事業譲渡、遺言信託・遺産整理等の相続関連業務等をサービスメニューに加え、地域の総合金融サービス業を標榜しています。

最近話題のフィンテックについても、他地銀等と共同で専門会社を立ち上げ、新たなサービスの開発等に着手しています。また、金融以外の社会的課題に対しても、地域で主導的な役割を果たしています。

ローカルアベノミクス・地方創生では、融資制度の新設や千葉大学・自治体との連携事業等への参画のほか、地域企業の業容拡大や地域産業の活性化への支援等をつうじて地域に好循環を作り上げる

ことに尽力しています。

ウィメノミクス・女性活躍推進では、自行の女性の職域拡大と積極的登用に加え、配偶者の異動等で退職を余儀なくされた職員に転居先の地方銀行を紹介する「地銀人材バンク」の設立に主導的役割を果たし、「女性が輝く先進企業における内閣総理大臣表彰」や「ダーバーシティ経営企業１００選」を受賞するなど、業界・地域の中でリーダーシップを発揮しています。

以上、少々ＰＲになってしまいましたが、銀行に対する理解の一助としていただければ幸いです。当行には千葉大学卒業生１８３名が様々な部署で活躍しています。企業経営のことや人生設計等でお悩みのことがあれば、遠慮なく当行窓口にお越し下さい。卒業生一同、心からお待ちしております。

サークル紹介

千葉大学には現在178団体の公認サークルがあります。
同窓生の皆さんも大学生活の中でサークルに所属していた方が多いのではないでしょうか。
現役生より現在のサークル活動をご紹介します！

vol.3　POSEIDON

千葉大学体育会アメリカンフットボール部“POSEIDON”は現在、関東大学リーグに所属しており、上位リーグへの昇格を目標に日々西千葉のグラウンドで練習しています。練習は週5日あり、学業との両立も大変ですが、だからこそ試合で勝利したときの喜びは格別です。アメフトはポジション毎に求められる能力が大きく異なるため体格も性格も様々なメンバーが揃っています。そんなメンバーが同じ目標に向かって共に戦うのもアメフトの魅力の一つだと思います。

また、千葉大アメフト部は今年で創部40周年を迎えます。引退されたにも関わらずグラウンドまで足を運び練習相手になって下さる先輩方、遠くから応援に来て下さる方々も沢山いらっしゃいます。大学を離れてからもアメフト部に携わって下さる方が多いのは、それだけ千葉大アメフト部のことが好きだからだと思います。勝つために本気で活動しているので楽しいことだけでなく、辛いことも沢山あります。しかし辛いことも含め、真剣に仲間と共に切磋琢磨し成長した日々というのは、一生忘れられない時間となるのかもしれません。

今私たちが千葉大学でアメフトをできるのは、この40年の歴史を作ってきた多くの先輩、関係者の方々の支えあってのことです。私たちはこうした皆さんの思いと、千葉大学の看板を背負って戦っていることを誇りに思います。今年こそ昇格するために、全力で取り組んでいきますので、どうか応援宜しくお願いします！

「非行少年との対話」
～NPO法人『対話の会』が行う少年院における被害者視点教育～

本八幡朝陽法律事務所長
弁護士
鴨下智法
（平成9年卒・同24年大学院専門法務研究科修了）

千葉県八街市にある『八街少年院』。

塀の内側、戒護区域の中にある、視聴覚ホール。

千葉大学法経学部法学科を卒業、同学大学院専門法務研究科を修了し、弁護士となった私は、あるNPO法人のメンバーとして、この少年院に収容されている少年を対象とした授業に参加している。

被害者の視点に立って、自分の犯した非行を見つめなおす・・・。授業では、NPOのメンバーと少年とが円を作って座り、グループディスカッションや個別対話を行っている。この日の授業は、（法務省矯正局）東京矯正管区による視察が行われていた。法務省職員や裁判官、他の少年院で指導に当たる法務教官など、多くの大人たちが授業の様子を見守る中、ひとりの少年は、悪びれた様子もなく、こう言った。

「自分がしたことが間違っていたとは思わない・・・。」

八街少年院は、いわゆる長期処遇の少年院であり、非行の進んだ少年を収容する。再入（2回目以降の少年院）少年も、全体のおよそ6割に上る（平成28年4月現在）。

暴走族や不良グループの縮小、振込め詐欺の急増もあり、近年、少年院に収容される少年の構成は大きく変容している。いわゆる〝フダ付きのワル〟は減少、大学生が収容される例も決して珍しくない。少年それぞれの気質も時代と共に移り変わり、少年たちの教育・処遇にあたる教官たちの頭を悩ませる。

授業を行っているのは、NPO法人『対話の会』。千葉県弁護士会所属の弁護士や千葉地方裁判所所属の調停委員、当学部で刑事政策、少年法を教える後藤弘子教授をはじめとした学者の先生方、そのほか多くの協力者が集まり、平成13年に産声を上げた。

『対話の会』は、〝修復的司法〟という考え方に基づき、犯罪被害や学校・地域紛争といったトラブルによってこじれてしまった人間関係がもたらす害悪を修復するための活動を行っている。修復的対話という手法を実践し、現実の紛争において修復的司法を活用する団体は、全国的にも珍しい。

『対話の会』による八街少年院での授業は、平成19年から始まり、もう9年目になる。さきの法改正により少年院における矯正処遇のあり方が改められ、被害者の視点を取り入れた教育を行うことが明示された。『対話の会』の授業は、この被害者視点教育のモデルとして認められ、法務省矯正局少年矯正課による教育プログラム策定にも、大きく貢献している。非行の進んだ少年たちに被害者の気持ちを理解させ、更生の道を進ませるべく、月に1回のペースで、授業を行っている。

私が『対話の会』に参加するようになったのは、前述の後藤弘子教授が主宰する研究会の席で、理事長を務める弁護士の先生と出会ったのがきっかけだった。当時私はまだ専門法務研究科の学生

で、司法試験合格を目指して勉強に取り組んでいた。

『対話の会』の活動に参加すると、そこには、座学では味わうことのできない、迫力ある司法の姿があった。

平成25年に司法試験に合格した私は、司法修習（67期）を経て千葉県弁護士会に登録、マチ弁として県内を駆けずり回る。刑事事件や少年事件を扱うなかで、自らの過ちを償おうとする犯罪者、非行少年と向き合えば、彼らの抱える闇の部分から目をそむけるわけにはいかない。

冒頭の少年はまだあどけない顔つきであるが、時おり見せる醒めた表情からは、無機質で、とても冷たい印象を受ける。人間不信が強く、母親など家族への反感も隠そうともしない。

お母さんがキミの犯した非行と同じ被害にあったとしたら、キミはどう思うかな。私の問いかけに、少年は答える。「もし、母さんにも責任があるのなら、被害にあっても仕方ないと思う。」「母さんに非がないのなら、多額の賠償金を請求すればそれで済むこと。」

少年の口からは、〝損害賠償〟や〝責任〟といった、機械的な言葉ばかりがこぼれてくる。母に対する思いやり、身近な人が被害にあったことに対する感情などがこもった言葉は、出てこない。愛情、友情といった情緒的な感情が、十分に育まれていないのかもしれない。少年の口から発せられる言葉に耳を傾ける私は、彼の心の声を探ろうと、思わず前のめりになる。

少年院に収容されている子どもたちの中には、難しい環境で生きることを余儀なくされる子も多い。真面目さに欠けているような子だっている。親との愛着形成が不十分なまま幼少期を過ごした子は、大人不信が顕著である。発達障害などの困難を抱える子も多い。

それでも、少年院での生活を通じて大人たちがかかわりを深めていくことで、そうした子どもたちを良い方向に導くことができるはずだ。さまざまな事情から日々の生活に失敗し、ここにやってきている子どもたちには、大人の手助けが必要なのだ。

相手のことを何も知らないということは、文字通り怖いことだ。いわゆるモンスター視というヤツ。矯正教育の現場である少年院の内側というのも、一般にはあまり知られていない。少年院に収容される子どもたちは、社会に出てからも、世間からおかしな偏見を持って見られるのかもしれない。

幹部教官の一人は、収容された少年を理解するには、その少年をよく観察し、対話することが肝要だと言う。観察と対話によって少年に寄り添う矯正教育が実現されるなら、それは『対話の会』が実践する〝修復的司法〟の理念にも通じるものがある。

『対話の会』の一行は、子どもたちに寄り添い手を差し伸べる大人の一員として、毎月、八街少年院に足を運んでいる。

『対話の会』の活動は、同会のブログ（http://taiwanokai.org/blog/）やホームページ（http://taiwanokai.org/）において、詳しく紹介している。ご興味を持たれたら、こちらをご覧いただければ幸甚である。

多方面で活躍される卒業生

内原絵美
（平成14年卒）

法経学部総合政策学科を２００２年に卒業した内原絵美と申します。今回このような執筆の機会をいただき光栄です。

大学卒業後は、製薬会社や広告代理店の営業職として勤務していましたが、昨年、趣味をもとに起業するという人生での大チャレンジに踏み切りました。これからの長い人生を考えた時に会社員生活では物足りず、ずっと「いつかは自分で起業してみたい」と夢見ていました。その夢を現実のものとできたことに嬉しさを感じる一方で、起業による苦労や大変なこともたくさんあります。そんな私の起業までの道のりと現在のビジネス展開について、少しお話させていただければと思います。

○創業までの道のり

キャリアウーマンとして順調な道を歩んでいましたが、クリエイティブなものづくりへの興味が年々増し、ふとしたきっかけで通い始めたBagスクールを機に「Bagデザイン・製作」にはまります。それはイタリアへBagデザイン留学(今から7年ほど前)に行ってしまうほどの凝りようでした。その後は会社員の傍ら、趣味・副業としてオリジナルBagブランドをスタートさせました。

副業としてきたBagビジネスが転機を迎えたのが昨年のこと。結婚を機に埼玉県本庄市へ移住し、地域の創業スクールに参加したことがきっかけです。その創業スクールでは、ビジネスアイディアの種の見つけ方に始まり最終的にはビジネスプランの作成に至るところまで、ビジネスの実践を視野に入れた多岐に渡った内容での講義構成で、起業に対する意識がかなり刺激されました。また、この創業スクールに通うことにより、地域に対しての興味と人脈が広がったことは私のビジネスでは大きな収穫でした。それにより、地域資源（伝統工芸）と出会うことができ、それを素材として用いたBagの開発を思いついたことは、創業への大きな第1歩だったと思います。そしてついに、思いきって昨年10月に会社員を辞め、Bagで創業しました。

○現在展開しているビジネスについて

埼玉県本庄市に拠点を置き、革および布を使用したオリジナルBagのブランドを展開しています。オールレザーのBagの他、主力製品として、伝統工芸（本庄絣および、本庄近郊の伝統工芸）の技術・素材を活かしたBagの企画製造販売を行っています（参考：写真1）。デザイン・企画立案～型紙作成～製作～販売まで一貫した製作体制をこの地域の人材でまかない、素材についても地域の伝統工芸を積極的に使用することでブランドとしてのオリジナリティを出しています。

今後は、地域の行政と協力し、本庄の伝統工芸体験（織体験）などのツーリズムとBag制作ワークショップとのタイアップ展開等も検討中です。

（参考：写真1　地方伝統工芸の技術・素材を活かしたBagの企画製造販売）

○自信となった全国大会での優勝

この度、優れたビジネスプランを競う「第2回全国創業スクール選手権（２０１６年2月開催）」にて、大賞である「経済産業大臣賞」を受賞いたしました。これは全国各地で開催されている創業スクール２５６コース（２０１５年

実施のコース数）の中で各コース優秀者を選出し、その優秀者間で書類審査・面接審査・プレゼンテーションを経て全国大会として競うものです。ただのBagブランドビジネスというだけでなく、イタリア仕込みのデザインと日本の伝統工芸とをうまく融合しひとつのイノベーションを生み出した点を審査員の方々にご評価いただき、この大賞の受賞となりました。

自分のビジネスプランがどこまで通用するものなのか、ひとりよがりのビジネスではなくはたして万人に受け入れられるものなのか、ずっと不安でしたが、この全国大会での優勝経験が大きな自信へとつながりました。また、この受賞によって、かなりの反響があり、新聞やTV含め、さまざまな媒体にてビジネスをご紹介していただき、大きなPR効果となりました。

しかし、長い目で見ますと、このような受賞による売上増加やPR効果は永久的に続くものではないと思っています。この機会を逃がすことなく活かしつつ、常に新しい展開を考えながらビジネスを大きくしていこうと考えています。

○地域資源を活用したビジネスの難しさ

私のビジネスは、地域資源（伝統工芸）を活用するという地域性の側面をもったものですので、地域行政やその地域に住んでいる方々の協力が不可欠ですし、そこが難しい面でもあります。Bag自体のデザイン力やPR力のみならず、地域資源（伝統工芸）自体の抱える問題点、例えば後継者不足や衰退の危機等も同時に解決していく必要性があるということです。

地域の理解を得たり、地域でビジネスに関わってもらう人材を育てるには時間も労力もかかりますし、市や県や地域の商工会議所等さまざまな行政組織とのいい付き合いがないと大きく展開ができないという難しさがあります。しかしその反面で、埋もれている素晴らしい地域資源を世にアピールできるという点や、地域の活性化の一助となれていることに、とてもやりがいを感じています。Bagという自分の趣味からスタートしたビジネスですが、今それを活かして地域資源復活という社会貢献的な意味合いをもつビジネスとして展開できていることに私自身も誇りを感じています。

○今後の展望について

地域の特色・人材の能力を最大限に活用し、地域の伝統工芸の技術・素材を活かしながら、「世界に誇れる本庄発信のBagブランドに育てる」ことを目標にしています。

本庄発信のBagブランドとして、行政にも協力いただきつつもりたてていくことで、現在は国内展開のみですが、早い段階で海外展開も視野に入れていく予定です。

数年後にひかえたオリンピック開催を視野に、日本の伝統工芸を使った外国人向けの新商品開発の取り組みについては、今国や各自治体も力を入れてきていますし、今後さらに各企業で開発が進んでいくのかと思います。その盛り上がりも私のビジネスにとってはいい商機となりそうです。

○さいごに

私のBagビジネスの挑戦は始まったばかりです。このビジネスによって、地域再生・活性化（本庄市を若者にとっても、魅力ある土地へ）ができたらうれしいことです。

まだ女性においては、結婚・出産したらなかなかスムーズな社会復帰が難しい状況にありますし、働き方でいうと、起業という選択肢を考える風潮がまだ女性には根付いていないのではと感じています。女性としての幸せと働き方の両立について悩み、会社員でいるか起業するかで悩み、自分の得意な部分で起業するという道を選ぶ（趣味からの起業）、という私のケースはもしかしたら女性にとって身近で共感のもてるロールモデルかもしれません。

女性の活躍は今後の日本を支えていく大きな原動力になるでしょう。私自身、地域の若手や女性起業家を目指す人達に良い影響と刺激を与える存在になれるよう、さらに精進していきたいと思っています。

Essay

卒業生エッセイ

大学とカフェ

金融庁
越川　剛
（平成5年卒）

昨年9月、学部同窓会総会及び司法試験合格者祝賀会の席に招かれ、久々に千葉大学を訪れた際、帰りにふと大学の近くにあるカフェに寄ってみました。一杯のホットコーヒーを楽しみつつ、たった今まで懐かしい先輩方や後輩達と楽しんでいた会話の余韻に浸っていると、周囲の方々の会話の中から、その日が土曜日であったということもあってか、現役の千葉大生たちの会話に交じって大学の教職員やOG、OBと思われる方々の声も聞こえてきました。

大学時代、私は同じ学年の仲間や先輩方、後輩たちと学内や大学近くのカフェでいろいろと会話を楽しむことがとても好きでした。話の中身はもちろん他愛もないことばかりだったと思うのですが、ただそうした光景を、最近とても懐かしい思い出として時々思い出すことがあります。

大学時代、体育会やサークル活動に力を入れていた方々にとっては、先輩方や同じ学年の仲間、また後輩達と自身が所属するサークルの運営方針やその中での人間関係等について話し合ったこと、アルバイトに力を入れていた方々にとっては、授業が終わってこれからアルバイト先に向かう前のわずかなひと時、一杯のレモンティ、ミルクティやコーヒーが活力源となったこと、また司法試験や公認会計士試験等資格試験の勉強等に取り組んでいた方々にとっては、ふと勉強の合間に頂く一杯のコーヒー、紅茶やココアのひと時を楽しまれたこと等、皆それぞれが懐かしく貴重な思い出を、かつて大学時代に自身がよく行ったカフェに持っているのではないでしょうか。私は大学時代の友人や先輩、後輩たちと久しぶりに会って食事をする時、西千葉界隈のレストランや居酒屋を選ぶことがよくあるのですが、大学時代の仲間たちと会っている時は、心は懐かしいあの頃に戻ってしまうという心理が無意識のうちに働くからかもしれません。

学期末試験が終わった後、持てる力をすべて出し切った後の解放感に満ち溢れた表情の多くの学生を、学内や大学近くのカフェでよく見かけます。以前、スタンフォード大学に留学していたことがあるのですが、当時のことを思い出してみても、これは日本に限らず世界中どこの国の大学であっても同じことが言えると思います。

最近はスマートフォン等でインターネットもゲームも自由に楽しめる時代になり、カフェでも一人で下を向いてゲーム等に興じている若い人たちの姿をよく見かけます。もちろんそれもカフェの楽しみ方の一つだと思いますが、一方

でせっかくすばらしい仲間達に囲まれた貴重な学生時代、もっと別の有意義な過ごし方の選択肢というのもあるのではないかと思います。学内もしくは大学近くのカフェで、他愛のない話であっても良いのです。仲間たちと大いに語り合い、そうしたことを通じて同級生、先輩方や後輩達との親交をより深めておくということもまた、貴重な学生時代のうちにぜひ経験しておいて頂きたいと思います。そしてこうしたことというのは将来、特に現在千葉大学に在学中の後輩の皆さんにとっては単なる懐かしい思い出ということだけではなく、これから社会人として羽ばたいていく上で必要な人脈形成等の観点からも、大変貴重な財産にもなることと思います。

大学トピックス

千葉大学が平成28年度 国公立大志願者数ランキングで1位になりました！

2015年度に国公立大学の志願者数1位だった東京大学は、2016年度に推薦入学を導入し、後期日程試験を廃止した影響もあり、志願者数は9,278人と前年度の1万2,384人から3,106人減少。

一方、千葉大学は９学部に加えて2016年度に国際教養学部を新設。

国際教養学部の志願者数は369人、大学全体の志願者数は1万1,357人と、前年度の1万145人から1,212人増加しました。

コミュニケーションマーク制定

CHIBA UNIVERSITY

平成28年2月、千葉大学が「世界最高水準の教育研究機能を有する総合大学」としてさらなる発展を遂げていくため新しいコミュニケーションマークを制定しました。

マークの色は、大学カラーのガーネットを基調としてデザインしており、形は、本学のビジョン「Global、Research、Innovation、Branding、Synergy」の原動力となる、学生・教員・職員のコミュニケーションを表現しています。

構成員一人ひとりが、様々な場面でこのマークを使用することで、大学の一体感を強めるとともに、千葉大学ブランドを高めていきます。

2015年、第53回千葉大祭・ミスコンテストで 法政経学部の「宮本麗美」さんがグランプリに輝きました。

宮本さんは現在岩手テレビのアナウンサーとして活躍しております。

2013年は松浦涼馬さんがミスターコンテストでグランプリ、2014年は谷元星奈さん、2015年は宮本麗美さんがミスコンテストでグランプリと学部後輩が3年連続でグランプリを獲得しておりました。

今年の第54回コンテストでは惜しくも学部後輩のグランプリ選出はならず連覇はストップしてしまいましたが、また来年に期待したいと思います。

コラム

苦難の先の光を目指して

弁護士法人はるか茨城支部
茨城水戸法律事務所
弁護士
山田千尋
（平成24年卒・同26年大学院専門法務研究科修了）

平成27年9月26日、例年通り開催された司法試験合格者のための合格祝賀会でしたが、筆者が前年祝われる側として参加した合格祝賀会とは異なり微妙な空気が流れていました。来賓の方々による挨拶も、合格者を祝福する反面、何やら歯切れの悪さを感じました。それもそのはず、法科大学院設立以来合格率トップ10を維持してきた千葉大学法科大学院が、そこから陥落することになってしまったからです。しかもその内実、現役既修者コースの合格者「0」という数字は、受験者だけでなく、千葉大学法科大学院の関係者全員に衝撃を与えたものでした。

千葉大学法科大学院を取り巻く状況は深刻です。法科大学院受験者数は減少の一途を辿り、大きく定員割れをする法科大学院も増えています。都内の上位法科大学院への入学が容易くなり、今の千葉大学の学部生は千葉大学法科大学院を滑り止めにするどころか、そもそも受けないという選択をするほどです。筆者が学部1年生の頃、「千葉大生は千葉大学法科大学院には受からない」と言われていたことが嘘のようです。それでも高い合格率ゆえに生徒を確保してきた千葉大学法科大学院でしたが、この度の合格率の激減によりそれが難しくなると考えらえます。

合格祝賀会の微妙な空気は、このような関係者の不安からきたものと思います。しかし、合格祝賀会にきた合格者たちは、司法試験合格という狭き門をくぐり抜けてきたのです。合格率云々は彼らには関係がないのです。壇上に上がり法曹への思いを語る彼らの表情は凛としていて、頼もしいものでした。彼らのそんな表情をみて、きっと彼らは素晴らしい法曹になると誰もが確信したことでしょう。祝賀会終盤には微妙な空気は晴れ、全員が彼らに割れんばかりの拍手を送りました。

さて、筆者はこの場を借りて、これから法曹を目指そうとする学部生、現在法科大学院で勉強をする後輩たちに考えてほしいことがあります。この度、現役既修者コースの合格者は「0」でした。しかし、筆者は彼らが決して怠惰ではなかったことをよく知っています。彼らは毎日勉強に励み、自主ゼミを組んで切磋琢磨し、司法試験合格に向けて惜しみない努力を捧げていました。それでも合格ができなかったのは、なぜなのか。筆者が感じているのは、合目的的に勉強することができていたか、という点です。例えば野球であれば、速いボールを投げるためには、筋肉が足りないのか、フォームが悪いのかをまずは明らかにする必要があります。フォームが悪いのに筋肉だけ鍛えても、筋肉が足りないのにフォームだけ磨いても仕方がないのです。勉強も同じです。いい答案を書くには、まずは自分の足りない点を分析する必要があります。その上で、その足りない点を補うにために必要な勉強をします。また、時間は有限であるため、限られた時間の中で合格ラインを超えるためには、どういったタイムスケジュールでそれらの足りない点を補っていかなければな

らないかを考えなければなりません。これらを意識するだけでも、勉強によって得る効果は大きく変わってきます。伸び悩んで苦しいとき、まず一旦冷静になって自分の勉強を見直してみてください。

現在法曹についてはネガティブな報道が多く流れています。苦しい思いをして合格しても、待っているのは就職難。けれど、苦難が全てではありません。筆者はまだ経験の浅い新米弁護士ですが、弁護士になったことを後悔した日は一日たりともありません。合格祝賀会で会った合格者たちも、後ろを振り返ることなく、猛然と茨の道を駆け抜けていくと、筆者は確信しています。そして、悔し涙を流した後輩たちが、平成28年合格祝賀会で凛とした表情で未来を語ってくれることを期待しています。

同窓会 Information だより

平成27年度 同窓会総会開催

平成27年9月26日（土）千葉大学西千葉キャンパス・人文社会科学研究棟マルチメディア講義室で千葉大学法政経学部同窓会総会が開催されました。

記念講演ではいすみ鉄道の鳥塚亮社長に「発想の転換と経営戦略」というタイトルにてご講演いただき、ローカル線の魅力やその魅力の再発見、伝える方法等々、固定概念にとらわれないユニークな発想で功を成されている大変貴重なお話を聞くことができました。

鳥塚社長は総会後の懇親会にもご参加くださり会員の皆様との交流を深められておりました。

平成28年度 同窓会総会について

例年7～9月頃に開催されておりました同窓会総会並びに懇親会は、諸事情により、止む無く今年度は中止とさせていたくことに致しましたのでお知らせいたします。

楽しみにされていた皆様には、多大なご迷惑をおかけしますこと、また本誌面をもちましてのご案内となりましたことを、心より深くお詫び申し上げます。

なお、次年度総会につきましては、例年通り開催する予定でございます。開催日時が決定しました際には改めてご案内いたしますので、よろしくお願い申し上げます。

理事役員一覧

役　職	氏　名	卒業年
会　長	吉　永　英　明	Ｓ３９
副会長	渡　部　靖　征	Ｓ４３
理　事	藤　崎　吉　彦	Ｓ４４
〃	鈴　木　幸　男	Ｓ４３
〃	吉　野　　聡	Ｓ４４
〃	片　山　隆　明	Ｓ４７
〃	飯　笹　伸一郎	Ｓ４７
〃	八　代　伸　久	Ｓ４８
〃	山　田　善　一	Ｓ５１
〃	渡　邉　誠　吾	Ｓ５３
〃	萩　原　　博	Ｓ５３
〃	井出　浩司	Ｓ５５
〃	石　橋　秀　樹	Ｓ５６
監　事	岩　出　　誠	Ｓ４８
〃	川　村　　敦	Ｈ０１
学内理事	大　塚　成　男	
顧　問	押　尾　公　人	Ｓ３５

（平成２７年度８月現在）

同窓会へのお便り・情報を募集

皆様の近況報告、誌面への掲載希望や紹介、クラス会・OB会の報告など何でも結構です。
お気軽に同窓会事務局までお寄せください。

千葉大学法政経学部同窓会事務局　FAX 043-290-3655
Eメール info@culpe-ob.com

編集後記

今年も残すところ数日となりました。師走の慌しい中ではございますが、会員の皆様におかれましてはお変わりありませんでしょうか。

今年度は同窓会総会の中止などにより会報の発行が例年より遅くなりましたことを心よりお詫び申し上げます。

寄稿いただきました皆様には発行時期の遅延により記事の内容に相違を生じさせてしまったかもしれません。お待たせいたしまして大変申し訳ございませんでした。

今年は世界情勢も大きく変わった年になったと感じています。

英国のＥＵ離脱や米国大統領選など上げればキリがない程、連日ニュースを賑わせておりました。激動の国際情勢の中、国際的に活躍できる人材の育成を目指し今年度千葉大学は国際教養学部を新設しました。世界に輝く未来志向型総合大学としてますます発展されることを祈願しております。

末筆ではございますが、会員の皆様のご多幸をお祈りするとともに、今後とも同窓会活動にご理解とご協力賜りますよう宜しくお願い申し上げます。

（編集委員）